二〇二二年一一月四日

ジョギングの足とめてきく残る虫　豊　実
眉引きがうまく描けぬ秋思かな　ぽんこ
スケッチの場所を求めて野路の秋　む　べ
軒下の音符のやうに柿すだれ　千　鶴
枯蓮や矢刀折れに地獄絵図　ぽんこ
見送りの衿かき合はす星月夜　ひのと
歴日の巨木の並木黄落期　せいじ
喫煙所にて朝寒を言ひ合へる　ひのと
千歳飴折りて分け合ふ姉いもと　なつき
ドアは手で開ける電車やそぞろ寒　明日香
菜々さんのいつもの席に菊の花　はく子

二〇二二年一一月三日

亡き父の文読み返す秋灯火　もとこ
杉玉のはや黒々と冬始め　たか子
気の強いひとは泣きむし衣被　ひのと
李白の詩皆で吟詠文化の日　千　鶴
畳の目数えて伸びる冬日かな　たか子
小春得て一家総出の庭手入　あひる
陸軍墓地一断碑にも菊の供花　ぽんこ

二〇二二年一一月二日

亡き友のアルバム広げ秋惜しむ　満　天
生駒嶺は夕映えながら初時雨　たか子
小鳥来る百度参りの小さき背に　なつき
あとがきを読む長き夜の鼻眼鏡　ひのと
蹲踞の杓に掬ひし星月夜　澄　子
林道に垂れて届かぬ通草の実　あひる

二〇二二年一一月一日

背中押す霧笛や長き港坂　素　秀
木枯しに下校子ら皆駆け足に　満　天
百雀を丸抱へにす冬木立　せいじ
つんつんと尖りて葱の畝長し　あひる
朝露に濡れをる牛の鼻輪かな　ひのと
漆黒へなげ入れしごと匕首の月　もとこ

二〇二二年一〇月三一日

衣被小鉢に手前味噌添えて　智恵子
甘藷掘りの赤白帽子奇声あげ　満　天
ビル街に見失ひたる弦の月　あひる
オスプレイ墜ちて来ぬやとそぞろ寒　明日香
竹林の奥に茶室や石蕗の花　智恵子
湯けむりの鉄輪訪ねむ湯治旅　千　鶴
一羽また一羽と鳩のひつぢ田へ　せいじ

二〇二二年一〇月三〇日

書き出しに迷ふ筆先秋灯下　ひのと
ハロウインの魔女はいつでも飴持ちて　もとこ
落ち鮎の流れに任す命かな　宏　虎

二〇二二年一〇月二九日

力石膨らむごとき小春かな　こすもす
炭爆ぜて秋刀魚の匂ひとばしけり　かえる
太陽の塔秋天をハグせむと　あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年一一月六日